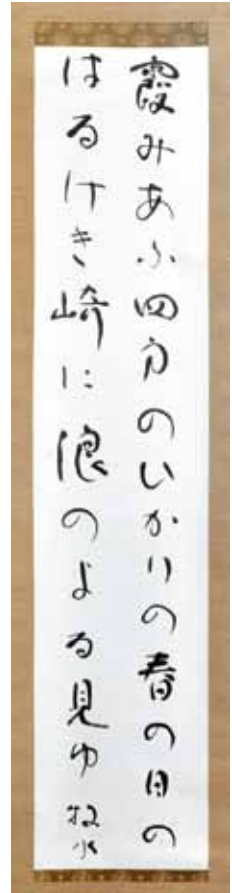


沼津市若山牧水記念館

第62号 平成31年3月1日 編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



霞みあふ四方のひかりの春の日はるけき崎に浪のよる見ゆ 牧水

牧水は、大正七年二月七日に伊豆土肥温泉に赴き、二十四日まで滞在したが、そのときに詠んだ八十四首のうち一首で第十二歌集『溪谷集』に収められている。

この伊豆土肥温泉行については、散文集『海より山より』の中の「浴泉記」に日記風に詳しく書いている。「浴泉記」によると、この土肥温泉行は、春陽堂から出す約束になっている『短歌作法』を書き上げることと、新潮社から出す散文集『海より山より』の編集と南光堂から出す歌集『さびしき樹木』の編集が目的だった。散文集『海より山より』と歌集『さびしき樹木』は編集することができたが、『短歌作法』は原稿用紙を五百枚も用意して持って行ったが、全く手をつけずに残してしまっただけだった。

二月七日から投宿した明治館は、土肥温泉では大きな方の宿で、この年の元旦から二日まで加藤東籬と訪れた時は大変混んでいたが、二月になれば空いていると考えて赴いたところ、付近にある金鉞発掘の鉞夫たちが大勢つめかけていて満室だった。内儀の「静かなだけをよいにして頂け

るなら土蔵の二階があいてる」との勧めで、その部屋に腰を落ち着けた。

二月十五日に付近を散歩し、仕事をやる気になって宿に戻ってきた矢先、

無知な横著な女中どものためにつきつかり痲癩を起させられ、終に一日減茶減茶となる。

そこで転宿を考え、知り合った按摩のすすめで吉村屋という宿へ十七日に移った。二十二日になり、

今まで東京を離れて旅に出さへすれば、たとへ二日三日のそれでも二十首、三十首、時としては百首位を作らずに済んだことは先づ殆んど無い。それが今度は二十日から斯うしてゐて、それも人に逢ふでなく、する筈ではあるが仕事をすのでなしに終に殆んどよう作らなかつた。あたりの自然などは、大きいところこそないが誠に私の気に入つてゐる此処なのである。矢張り自分の気の張つてゐない、生力の充実してゐないためである。さう思ふと、實際心細い。余事を思はず、とにかく身体を速くよくしようと思ふ。今日の様に、少し気に入つた歌が一首でも出来て呉れると、急に生き返つた様にうれしい。

と久方ぶりに短歌ができたことを喜んでゐる。掲示の短歌もこの日の作である。

なお、掲示の半折は、沼津市生れで、本会の発足時から会員の株式会社富士経済の会長だった阿部英雄様のご遺族敬子夫人から寄贈された牧水の半切四本のうちの一本で、喜志子夫人の「牧水自詠 霞みあふ」の箱書きがある。

牧水の魅力——歌集『黒松』の世界 三枝浩樹

僕の年代、あるいはその前後の広い年代層の人にとつて、近代短歌に親しむようになるきっかけは啄木と牧水だろうと思います。この二人に共通しているのは親しみやすさです。親しみやすいということは共感しうること、思いを同じく出来るということですね。歌われている内容を我がこととして受け取ることが出来る。ああ、いいなあ、と素直に心が反応する愛誦性。そうした魅力です。

いのちなき砂のかなしさよ

さらさらと

握れば指のあひだより落つ

(明治四十三年・二十五歳)

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染ま
ずただよふ (明治四十一年・二十四歳)

こういう名歌は素直にそのまま読めばいいので、深読みなどは不要です。

啄木の歌からは、さらさらと指のあいだからとめどなくこぼれ落ちる砂の触感、手ざわりが伝わってきます。握っても握ってもさらさらとこぼれ落ちてしまう砂の感触が青春の感傷と響きあっ

ています。砂のこぼれ落ちる手ざわりが青春の崩壊感覚を連想させてくれます。

牧水の白鳥の歌からも、青年のかなしみ、憂愁の思いが伝わってきます。「哀しからずや」は哀しくないのだろうか、という問いかけです。これを反語と読むこともできます。哀しくないのだから、いや、哀しいに違いない、と。反語だと答えが半ば予想され、答えの含まれている問いになります。問いとして提出するのと、問いのかたちをとるものとは似て非なるものがあります。

「哀しからずや」は問いとして投げかけられたものだ、と読むのがいいのではないかと思います。反語だとすると、「白鳥は哀しかりけり」というのと同義合いとしては同じになります。「哀しかりけり」では、小さくまとまっていますね。

この問いにたいする答えは、歌の文脈を丁寧にたどれば見えてきます。一首全体の文脈から答えはやがて見えてくる。答えは作者と読者の共同作業によって得られるものですね。それがいいのだと思います。

「空の青海のあをにも染まらずただよふ」、問いにたいする応答部分でこの一首の感慨の中心です。「空の青海のあをにも染まらずただよふ」、ここがい

いのに、こんな持って回った言い方、ここまで言わなくてもよさそうなものだ、と反応する人もいます。

俳句的な簡潔な表現をすれば、「白鳥は哀しからずや空の青」、これで済む話だというのですね。内容的にはその通りですが、これでは読者の心を掴むことはできません。一首の歌のしらべがなくなってしまうです。意味以上にしらべが大事。しらべが歌にとつては肝心、要であつて、意味はそれから比べたら補完的なものにすぎない。牧水のこの歌からしらべがなくなつたら、あとに残る物は意味の形骸です。ぬけがらのようなものです。

白鳥は波に漂いながら浮かんでいるにしても、空と海のあいだを舞うように飛んでいるにしても、「空の青海のあをにも染まらずただよふ」という描写を踏まえた歌のしらべによって、そのたたくまが見事に捉えられています。孤独と宥和、周囲に融け合うところが孤立するところ、そのあわいでとめどなく漂う姿が哀しく美しく詠まれています。

第一歌集『海の聲』は牧水二十四歳の夏に、早稲田大学を卒業直後に出された歌集で、愛唱されている有名な歌がたくさん収められています。出版当時はあまり注目されませんでした。その二年後の明治四十三年一月に、第二歌集『独り歌へる』を出し、四月には第三歌集『別離』を出します。この『別離』が注目され高く評価されます。『別

「離」はその八割以上の作品が『海の聲』『独り歌へる』からの再録です。従って「白鳥は」や「山河」などの代表歌は『海の聲』『別離』の両方に載っています。牧水は初期の歌集の集大成である『別離』で不動の評価を得ました。しかし、牧水の十五冊の歌集（内、最後の歌集『黒松』は遺歌集）はそれぞれの味わいがあります。中期の第五歌集『死か芸術か』（大正元年・二十八歳）、第六歌集『みなかみ』（大正二年・二十九歳）、第七歌集『秋風の歌』（大正三年・三十歳）、そして晩期の第十三歌集『くろ土』（大正十年・三十七歳）、第十四歌集『山桜の歌』（大正十二年・三十九歳）などは愛唱したい歌がたくさんあります。初期だけがいいわけではないのです。

今日はみなさんと一緒に最後の歌集『黒松』を読んでみたいと思います。

ひとをおもふ心やうやくけはしきに降り狂ふ
雪をよしと眺めつ
人妻のはしきを見ればときめきておもひは走る
留守居する妻へ
をとめ子のかなしき心持つ妻を四人子よたりこの母とおもふかなしき

『黒松』の巻頭歌です。大正十二年一月に伊豆の土肥温泉に投宿した折の歌です。一人で出かけたようです。土肥はあいにくの荒れ模様で吹雪。「ひとをおもふ心やうやくけはしきに」に注目し

みましょう。この「ひと」は不特定多数の人ではなく、「わがひと」すなわち妻の喜志子さんでしょう。「ひとをおもふ心」が「やうやくけはしきに」と長い歲月、長い時間をかけて思いがはなはだしいもの、深いものになってきた、と感じているのですから、特定の人への感情です。「けはしき」はきついか厳しいというような意味ではなく、ここでは程度がはなはだしくなった、深いものになった、という意味だと思えます。そんな感情をもって吹雪く雪景色を眺めているのです。「降り狂ふ雪をよしと眺めつ」降り狂う雪のさまがそんな自身の感情と測り合うように近いものを感じられて眺めているのです。牧水三十九歳です。今では三十九歳はまだ中年ともいえない若さですが、三十九歳の牧水はもう老いを感じていたと思います。三歳下の三十六歳の喜志子を

肌はややかなしきさびの見えそめぬ四人子よたりこ
母のはしきわが妻
と詠んでいます。老いを感じながらも、人を思う心は初々しいのです。

次の歌の美しい人妻は同宿の客でしょうか、それとも土肥の町で見かけたのかもしれない。「はしき」は美しい、の古語です。美しい人妻をみかけて「ときめきて」、そのときめきは「おもひは走る留守居する妻へ」とわが人に帰ってゆくのです。初々しいつよこい嬌恋の歌ですね。牧水の歌は幾つに

なっても初々しく純情、純潔なのです。次もまっすぐな、順直な嬌恋の歌です。「をとめ子のかなしき心持つ妻を」です。初老にしてこのような初心の、なんとも初々しい心を大切なものに思っているのですね。乙女子のような汚れない心を今なお失わないうわが妻をいとおしく思うのです。その妻が「四人子の母とおもふかなしき」。乙女子の心を持ちながら、四人の子供の母であることに、つくづくいとおしいと思ひ、感謝の思いを感じているのです。



昨年(平成二十九年)、若山牧水賞をいただき、宮崎市での授賞式の翌日、日向市の坪谷の牧水生家を訪ねました。生家のすぐ前に幼少期に牧水が父親と鮎を釣った坪谷川がながれていました。目の前には尾鈴山系の山が眺められました。

ふるさとの尾鈴の山のかなしきよ秋もかすみ
のたなびきて居り (第六歌集「みなかみ」)

は、これなんだな、と歌の現場に立つ感慨は特別なものがありました。この牧水生家のすぐ脇に牧水と喜志子の二人の歌が並んで彫られている歌碑がありました。牧水の歌は、この

をとめ子のかなしき心持つ妻を四人子の母と
おもふかなしき

です。喜志子の歌は、昭和三年の秋、牧水の亡くなったとき詠まれた牧水への挽歌です。牧水の歌にも心打たれましたが、喜志子の歌がまた実にいいのです。

うてばひびくいのちのしらべしらべあひて世
にありがたき二人なりしを

牧水の歌でぐつときていたのですが、この喜志子の歌を読んだとき、涙が湧いてきました。牧水と喜志子、この夫婦はまさに「世にありがたき二人」、類い稀な夫婦だったのだな、と感動を禁じえませんでした。高村光太郎の『智恵子抄』の中

に「うた六首」と題した光太郎の智恵子に寄せる挽歌がありますね。「光太郎智恵子はたぐひなき夢をきづきてむかし此所に住みにき」という一首です。その歌が浮かんできました。牧水の喜志子を思う愛、そして喜志子の牧水を思う愛、世にたぐひなき夫婦の姿を思い浮かべ、涙がにじんできたのです。あの歌碑には感動しました。

うてばひびくいのちのしらべしらべあひて世
にありがたき二人なりしを

さいはひに人と生れて死にゆきしひとなるもの
を嘆かじわれは

行きゆかば事にも遇はむしかれども今日の嘆
きにますことはあらじ (筑摩野「若山喜志子」)

をさな日の澄めるころを末かけて濁すとは
すな子供等よやよ

すみやかに過ぎゆくものをやよ子等よ汝が幼
な日をおろそかにすな

牧水は両親に愛された幸せな幼少期を過ごしました。その経験がベースになってわが子等にとっての親の気持ちを伝えているのです。「をさな日の澄めるころを末かけて濁すとはすな」は世のすべての親の気持ちであり、願いでしよう。幼子が幼子らしくあること。幼い日々は「すみやかに過ぎゆく」ゆえに、「汝が幼な日をおろそかにすな」と祈りを込めて熱く子供達に呼びかけています。

庭木々の落葉しはてしのにあらぬほの明る
さを冬は持つなる
冬が持つこの明るさは揺れず移らずただひと
ところに籠る明るさ

みなさんは四季ではどの季節がお好きでしょうか。僕は最近までどの季節も捨てがたい魅力が感じられて、強いて言えば秋だけれども、他の季節もみない、と思ってきました。しかし、このところの夏の異常な暑さで、夏は嫌になってきました。甲府の夏の暑さは相当なものです。盆地は冬寒く、夏暑く、自然にいやでも鍛えられます。年を取ると、寒さが身に堪えるようになりますが、それでも冬の美しさには惹かれます。清少納言の『枕草子』。春はあけぼの、夏は夜、秋はゆふぐれ、そして冬はつとめて、と有名なくだりがあります。あけぼのは「夜明けの空が明るんでくる頃」ですが、つとめては「早朝、暁」で、今は明るくなつてからを示す言葉ですが、昔はまだ暗いうち、夜が明けようとするほどの暗い時間帯を示していたようです。「春はあけぼの」には、ほのぼのと白みはじめだした空のびやかな明るさを感じられますが、「冬はつとめて」からはきりつとした寒さの中に忍び込んでくる夜明けの気配が感じられます。牧水の冬の季節へ寄せた二首。「庭木々の落葉しはてしのにあらぬ」という上の句は「あらぬ」でなく、「あらぬ」と連体形ですから、そのまま

四句の「ほの明るさを」に接続してゆきます。庭の木々の落葉する様子を楽しみながら眺めてきたのでしよう。散る姿も土に落ちて積もっている姿も照葉樹の多い宮崎育ちの牧水には趣あるものを感じられたのです。落葉するのを眺めるのも楽しいが、散り果てて枝ばかりになった冬の木立の明るさを喜んでいるのです。

次の歌、「冬が持つこの明るさは揺れず移らずただひとところに籠る明るさ」にも句切れがありません。「冬が持つこの明るさは」は結句の「明るさ」に掛かってゆきます。そのあいだに「揺れず移らずただひとところに籠る」があるわけですから透明な明るさを湛えた冬のたたずまいの静けさ、それを愛でています。文言では触れていませんが、これは落葉して線描の枝ばかりとなった冬の木立を詠んだものではないかと思えます。緑の葉の茂る夏の頃の木は、風にそよいで揺れ移りますが、今はしんとした「ただひとところに籠る明るさ」の中にあるのです。夏の時間をそっと引き込んで静かな冬の木の眺めを愛でているのです。

「各つの木に 各つの影 木は しづかなほのほ」という詩が八木重吉にあります。重吉のこの詩も冬の木を詠んだものだと思います。

山川のすがた静けきふるさとに帰り来てわが
つが 労れたるかも (坪谷村)

寄った折の感慨です。「山川のすがた静けきふるさと」と簡潔な表現で故郷の山河、自然を詠んでいます。故郷に帰り、山河を眺め、年老いた母との再会を喜んだことでしょうか、感懐として詠まれているのは「帰り来てわがつが 労れたるかも」です。生きて来た歲月がおのずから思われて疲れを感じたのです。故郷という原点に帰って自分の来し方が思われての疲れであり、つが 労り。心の武装を解いて素に復ったときの感慨なのだと思います。

色さびし櫟くもぎのみち散る遅しおそしと見つ
わが飽かなくに

沼津千本松原の歌です。櫟の黄葉は色があざやかでも美しくありませんが、それはそれでまた趣があります。牧水はそんな櫟に思いを寄せています。いきなり「色さびし」と初句で切れます。さびしい黄葉の色だけれど、それがいいよ、と言っているのです。「櫟くもぎのみち散る遅し」と三句でも切れて、櫟の黄葉の様子をさらに丁寧な語でいいます。黄葉してから止む間もないほど散りやまない、銀杏のような木もありますが、櫟は枯れ色に色づきながらなかなか散りません。散るのが遅く、枝には枯れたまま残ったままの木守のような葉が見られます。落葉する様子、土に落ちた落ち葉の眺めも牧水は楽しんだのだと思います。枝に残って、なかなか散らない櫟を飽きることなく眺めている牧水です。

程近き松原に日ごと出でて来て日ごとにぞおもふ身の忙せはしさを
眼にうつる物のすがたのしづけきを静けしとしも見やるひまなき

ひとつひとつの物のすがた、たたずまい、物のもつ静寂さ。そういう物の前を忙しげに素通りしてしまふ自身の姿を省みて、あわれみ、いたわっているのです。詩人の黒田三郎に「自然は沈黙のなかですべてを語る せわしげに素どおりしてゆく者には その声は何もきこえない 遠いみどりの岬 柵のなかの砂 それだけのこと」という詩があります。相響きあうものを感じます。

故郷に墓をまもりて出でてこぬ母をしぞおもふ夢みてののち後に
うつしみの白髪人しらかみびとのかたくなの母をゆめみて
後のさびしさ
かたくなの母の心をなほしかねつその子もいつか老いてゆくなる

大正十四年牧水四十一歳です。夢に古い母が現れたのです。前年の大正十三年五月に母は沼津を訪ねてきています。親孝行の息子としては、このまま沼津で一緒に暮らそうと持ちかけられるのですが、故郷の先祖代々の墓を守るために帰る、と言って聞かない気丈な母でした。その母が現実のつづきのような夢に現れたのです。「母をしぞおもふ夢

みての後に」という下の句に母を思う気持ちに滲むように感じられます。「うつしみの白髪人の」「かたくなの母をゆめみて」「後のさびしさ」という次の歌にも同じ思いが見てとれます。「かたくなの母の心をなほしかねつ」、沼津に来るようにいくら言っても頑固な母は聞き入れない。「母の心をなほしかねつ」にはさすがに淋しさと諦めが感じられます。四十一歳の牧水が七十八歳の故郷の母を恋い慕っている歌です。

いる椎のはせて飛びぬればいにしへのわらはべの日の驚きをしつ

鬚の中に白きがまじる歳になりていよよ親しき椎の実の味

おさなごころを大切にしたりした牧水らしい歌です。椎の実を火にあぶって食べた幼い日々があつたのですね。椎の実をあぶっていると、爆ぜて飛び散った。そのとき「いにしへのわらはべの日の驚き」を同じように覚えたのです。長い年月の中で変わつたこともたくさんあるが、いかほども変わっていないこともある、とそのことに気づいたのです。椎の実をあぶって食べる愉しさ。昔も今も何一つ変わらないその風景。「鬚の中に白きがまじる歳になりていよよ親しき椎の実の味」もいいますね。幼い日々の懐かしい時間は過ぎ去らず、心の中に滞留しているのです。椎の実を味わうと、遠い日々の思い出が甦ってくるので、「いよよ親

しき」気分になるといふ訳です。

熾りたる炭火のさまをよしとおもふ猛く静けてはかなきぞよき

山に生ふる木々はうつくしみな親し焼きて作れるこの炭もまた

炭火の熾り行くさまを眺めている牧水。そのまなざしの中におのずから生き方、価値観のようなものが感じられてくる佳作です。「猛く静けてはかなきぞよき」、ここには力みのようなもの、自分に恃むような意志の力ではなく、大いなるものに身を委ねて生きる知恵のようなものが感じられます。「猛く静けて」しかも「はかなき」炭火。そのはかなさを受容する心です。「山に生ふる木々はうつくしみな親し」。自然の木はみな美しく親しく思われる。「焼きて作れるこの炭もまた」そうだ、と。身構えということのおよそない、はからいのない、のびのびとした自然との和合、宥和を遂げた晩年の牧水がここにいます。

たひらかにありがたき心われにあり苦しみあへぐわれみづからに

「たひらかにありがたき心われにあり」。平穏ですべてのものに「ありがたき」心を感じる、そんな思いが私の中にあるということです。「苦しみあへぐわれみづからに」たいしてもそういう感謝の思い、平らかな思いがある、ということです。

〔編集部 註〕三枝浩樹先生には、平成三十年七月七日(日)の第六十五回「沼津牧水祭・短歌大会」に講師としてお越しいただきましたが、その際の「講演ノート」をご寄稿くださいました。

〔筆者プロフィール〕 さいぐさ ひろき



昭和二十一年山梨県甲府生まれ。三枝昂之氏は兄。高校一年生の時に短歌結社「沃野」で作歌をはじめ。

大学時代に同人誌「風車」創刊、昭和四十四年に法政大学文学部英文学科を卒業。同年福島泰樹、伊藤一彦、三枝昂之らと同人誌『反指定』を創刊。同四十六年受洗。「かりん」、「りとむ」を経て平成二十一年「沃野」に復帰し代表となる。現代歌人協会、日本歌人クラブ各会員。山梨県歌人協会会長。山梨文化学園講師。歌集に『朝の歌』『銀の驟雨』『世界に献する二百の祈禱』『みどりの挿籃』『歩行者』。文庫歌集に『三枝浩樹歌集』『続三枝浩樹歌集』。評論集に『八木重吉たましひのスケッチ』平成二十八年(二〇一五年)夏物語』で第五十二回短歌研究賞、同二十九年第六歌集『時禱集』で第二十二回若山牧水賞、第五十二回逍空賞をそれぞれ受賞。

第二十九回 中学生短歌コンクール

二十九回目を迎えた恒例の中学生短歌コンクールに、市内十八校からの応募をいただき、一七九八首の短歌が寄せられた。入選歌四十九首の内、特選十首に選ばれた作品は、平成三十年十月二十一日(日)に開催された沼津牧水祭・碑前祭にて表彰式が行われた。以下、特選十首を紹介する。

庭先に植えたキュウリの苗木がね気付けば背丈競い合ってる
高田琉生(第四中)

背丈を競い合っている数本のキュウリを発見した作者はその瑞々しい生命力に喜び驚き、また、自らの成長を重ね見たのではないだろうか。

いつだっておおきなせなかにあこがれておおいこしたくておいつけなくて
福岡陸生(第三中)

目標とする「大きな背中」を見つめ追いかけていく若者らしい心が素直に感じられる。そして平仮名書きで全てまとめたのも心の声であることを読者に感じさせ効果的である。

大騒ぎ笑顔が良いねお姉ちゃん家族皆が笑顔になるよ
川口愛加(愛鷹中)

家族の笑顔の中心にお姉ちゃんがいる。そして何より作者はお姉ちゃんのことを大好きだというのが伝わってくる。明るく素敵な家族の笑顔が読

者にも届くだろう。

母からの進級祝いペンケース今日も変わらず私の相棒
鈴木梨佐子(第五中)

日々持ち歩き、使うたびに進級を喜んでいた母の笑顔に勇気づけられるのだろう。「相棒」という言葉に作者の気持ちが込められている。

人は皆誰かに言葉合わせてる自分の言葉あるはずなのに
蜂谷里奈(浮島中)

作者は自らの内面と外面の違いに気付き、悩み始めている。自分だけでなく周りの皆へも疑問を向けている。子どもから大人に変わる成長の中で、誰もが通る心の悩みであろう。

鮮やかな朱色の鳥居並ぶ坂にしえの世に続く気がして
土屋美遼(第四中)

修学旅行の一場面であろう。「いにしえの世に続く」という表現で異空間に迷い込むような敵かな雰囲気を感じられる。

息を吐く音だけ聞こえる持久走頼りになるのは努力した僕
松本漣(第四中)

毎日を持久走大会のため努力してきたのだろう。当日、どんなに苦しくとも頑張ってきた自分を信じるしかないのだ。息遣いが聞こえてくる。

あこがれのあの人なんていないけどいつかかならず青春謳歌
飯塚美羽(愛鷹中)

あこがれを持つことが、青春であることに改めて気づかされた。あこがれを探すということも青春期の特権である。作者は既に青春を謳歌し始め

ているのかもしれない。

昔にはけんかをしていた弟も今は無口の孤独
安藤匡吾(第二中)

弟の変化に気付き、その成長を思う作者。少し寂しさも感じるが、弟を気遣う作者自身も大きく成長をしているのだ。

「死ね、消えろ」何も思わず使ってる言葉の意味を考えてみる
高遠理沙(愛鷹中)

現代の若者が何気なく発している言葉が時として刃物のような武器となる。心持ち一つで人を温かく幸せにもする。言葉はその人自身なのだ。作者はそのことに気付けたのである。

選は、沼津牧水会理事の曾根耕一、青木朝子、永久保英敏、河本尚子で行った。(河本尚子)



第65回沼津牧水祭・碑前祭での表彰式
平成30年10月21日(日)

第二十三回若山牧水賞に 穂村弘氏の歌集『水中翼船炎上中』



(宮崎日日新聞社 提供)

第二十三回若山牧水賞は穂村弘氏の『水中翼船炎上中』に決まった。受賞作は穂村氏の十七年ぶりとなる第四歌集。授賞式は平成三十一年一月三十一日(木)宮崎市の宮崎観光ホテルで行われた。選考委員は、佐佐木幸綱、高野公彦、栗木京子、伊藤一彦の四氏である。

同日、選考委員である栗木京子氏の「牧水の女性観」と題した記念講演が行われた。翌二月一日(金)には、穂村弘氏による「牧水の魅力」の受賞記念講演会が日向市の日向市中央公民館で開催された。

穂村氏は昭和三十七年北海道札幌市生れ。上智大学文学部英文科卒業。歌誌「かばん」会員。日

経歌壇選者。短歌のほかにエッセイ、翻訳、絵本の執筆など幅広い分野で活躍している。歌集に『シンジケート』『ドライドライアイス』『手紙魔

まみ、夏の引越し(ウサギ連れ)』がある。平成二十年、短歌評論集『短歌の友人』で第十九回伊藤整文学賞、「楽しい一日」三十首で第四十四回短歌研究賞を、同二十九年エッセイ集『鳥肌が』で第三十三回講談社エッセイ賞を受賞している。

受賞に際して、同氏は「歌集では初の受賞。素晴らしい歌人たちが受賞した賞をいただけでうれしい。平成が終わる前に、昭和をまとめたいとの思いで出版した」と話している。

選考委員の各氏は以下のように評している。佐佐木幸綱氏は「昭和の風景を昭和の子どもの目で見て歌っていて、ノスタルジィが感じられる。意外性やサプライズ、夜の町にたむろする若者の姿を(ぼたぼた)と書くような表現の面白さがあり、現代短歌の特徴でもある」。高野公彦氏は「子ども時代、青年時代、現在に分け、昭和と平成の五十年間を見直そうという意識が伝わってくる。日常生活で目にするもの、日常の手ざわりを読み手に思い出させてくれる」。栗木京子氏は「満を持して出した歌集だけに充実していた。読み手が自分の世界に引き取り、対話しながら大事に読ん

でいきたい歌にあふれている」。伊藤一彦氏は「穂村氏の作品はそのものずばりを言わないが、口語を使った歌で、表現の意外性と愛唱性が魅力だ。若山牧水賞そのものにも一段と幅を持たせる受賞者になるだろう」。

歌集『水中翼船炎上中』から作者自選の十首を紹介する。

猫はなぜ巣をつくらないこんなにも凍りついでる道をとことこ

それぞれの夜の終わりにセロファンを肛門に貼る少年少女

天皇は死んでゆきたりさいごまで鼠肩の力士をあかすことなく

超長期天気予報によれば我が一億年後の誕生日 曇り

髪の毛をととのえながら歩きだす朱肉のような地面の上を

ゆめのなかの母は若くてわたくしは炬燵のなかの火星探検

鬼太郎の目玉おやじが真夜中にさまよっているピアノの上を

真夜中に朱肉さがししておとうさんおかあさん

おとうさんおかあさん

君と僕のあいだを行ったり来たりしてガリガリ君は夏の友だち

ぬいぐるみたちがなんだか変だよと囁いている引越しの夜